

アクティブ・ラーニングを意識した「教育課程論」の 授業スタイルに関する研究

白 鳥 絢 也

Practice and Analysis of “Curriculum Theory”
for Conscious of Active Learning

Junya SHIRATORI

2016 年 11 月 17 日受理

抄 録

本稿は、著者が担当する教職課程科目「教育課程論」における現状と課題を省察し、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業スタイル開発に資することを期したものである。本科目は「理論と実践の融合」を目指し、児童生徒と教師相互の視点から考えさせることを念頭に授業を展開することに留意している。冒頭部には毎時「アイスブレイク」として、学校現場で活用できるさまざまなワークを学生に体験させている。また、今後の学校教育において求められるアクティブ・ラーニングを意識し、後半部において毎時「対話」や「話し合い活動」を取り入れている。

理論と実践の調和を目指した一定の授業スタイル（冒頭部の「アイスブレイク」、中間部の「講義」、後半部の「対話・話し合い活動」）を確立してきたことへ、学生から肯定的な意見が多く見られた。教員志望学生に実践的指導力を身に付けさせる授業スタイルについて、展望を切り拓いたことが指摘できよう。

キーワード：教育課程論，アクティブ・ラーニング，授業スタイル，実践的指導力，
理論と実践の融合

はじめに

本稿は、筆者が担当する教職課程科目「教育課程論」の授業を題材にして、教員志望学生の実践的指導力の育成に資するための方途を探ることを目指し、アクティブ・ラーニングを意識した授業スタイルの開発を期したものである。

実践的指導力の養成を目指した研究は、例えば学生が学校行事の指導計画作成から模擬行事実習を取り入れた林・長沼（2008）⁽¹⁾や、学生による話し合い活動を意図的に取り入れた富岡（2014）⁽²⁾、web ページを作成・活用し学生に授業前学修課題を示した北（2016）⁽³⁾等、多数挙げられる。また、教育課程論をめぐる課題を先行研究の

吟味から克明に示した宮島（2013）⁽⁴⁾の研究も注目に値する。以下、これらの研究動向に注視しつつ、筆者が担当する「教育課程論」における試みについて紹介し、その成果と課題を考察していくこととする。

1. アクティブ・ラーニングを取り入れた授業スタイル開発を目指して

(1) アクティブ・ラーニングとは

中央教育審議会答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて』（平成24年8月28日）では、「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」と指摘し、従来のいわゆる「知識の詰め込み型」中心の教育から、学びの意味を学生に分かりやすく理解させた上で、教員と学生が相互に知性を高めていく「学生主体型」の学士課程教育に換えていくことが重要であることを示している。

また、同答申の『用語集』によると、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」（※下線部筆者）⁽⁵⁾と定義している。

これらを受け、福島（2015）は「能動的学修は、大学の教職課程科目において、学生に実践的指導力や授業力を育成する際にも重要なことであり、これらを育成する一つの方法として、学生に①学習者である子どもと同じ学習過程を「体験」させること、②学習における充実感・達成感や共に学ぶよさを「実感」させることなどが考えられる。」⁽⁶⁾と指摘している。具体的には、学生が主体的に課題を見つけ、その解決を図り、学習の成果を振り返る「課題解決的な学習過程」を取り入れて充実感や達成感を体験させたり、「グループワーク」や「相互評価」などの学習形態を取り入れて学習内容を深く理解させたり、共に学ぶよさを体験させたりすることが考えられよう。

(2) 「教育課程論」の内容及び受講者の実態

筆者の担当する「教育課程論」は、教育学部初等教育課程の1年次の学生（平成28年度入学）を対象としている。五つの専攻（国語・社会・数学・理科・音楽）の受講生を、週二日（水曜（国社音）・金曜（数理））に分け、授業を実施している。⁽⁷⁾

教育課程は、いわば学校の教育目標を具現化するための設計図である。教育課程の理論や制度は、特に1年生の学生にとって身近に感じることはなくイメージを抱きにくいものと想像できる。そこで本授業では、宮島（2013）⁽⁸⁾を参考に「望ましい教育

課程とはどのようなものか」というテーマを設定し、①学習指導要領や教科書をはじめとした教育内容・教育計画のガイドラインの存在と役割を知り、そのねらいや目標を理解すること、②教育を受ける児童・生徒自身が、それぞれの環境の中でどのようなニーズを持ち、具体的にどのように変化・成長しているのかを知ること重点を置くこととした。①については、教師として教育課程を編成していくためには、教育の制度や政策、法規、学習指導要領、学校現場における教育内容の決定の流れ等について学ぶことが必要である。また、②については、多様な子どもたちが授業を通して具体的にどのような学びを経験しているのかを読み解く視点を獲得することが重要である。

受講者の実態を把握するため、第7回目の授業において簡単なアンケート⁹⁾を実施した。このアンケートは、学生が入学後から約半年間の学修をふり返り、大学における授業のあり方や望む「授業形態」について探るものである。主なねらいは、本学の初等教育課程1年生の率直な思いを知り、第8回目以降の授業内容・方法の改善・構築に資することである。

「あなたが最も望む授業の形態は何ですか。」という質問項目では、事例として「講義」「演習・ゼミ」「実験・実習」の形態を示した。結果は表1の通りである。

表1 教育学部初等教育課程1年生（平成28年度入学）が望む「授業形態」

専攻	国語（28名）		社会（23名）		数学（28名）		理科（18名）		音楽（9名）
性別	男 （11名）	女 （17名）	男 （13名）	女 （10名）	男 （18名）	女 （10名）	男 （11名）	女 （7名）	女 （9名）
①講義型	4名 36%	8名 47%	9名 69%	5名 50%	4名 22%	4名 40%	0名 0%	0名 0%	4名 44%
②複合型 （講義＋演習）	3名 27%	6名 35%	1名 8%	1名 10%	6名 33%	5名 50%	7名 64%	4名 57%	5名 56%
③演習型	4名 36%	3名 18%	3名 23%	4名 40%	8名 44%	1名 10%	4名 36%	3名 43%	0名 0%
②＋③	7名 64%	9名 53%	4名 31%	5名 50%	14名 78%	7名 60%	11名 100%	7名 100%	5名 56%
専攻全体	12名		14名		8名		0名		4名
①講義型	43%		61%		29%		0%		44%
②複合型 （講義＋演習）	9名 32%		2名 9%		11名 39%		11名 61%		5名 56%
③演習型	7名 25%		7名 30%		9名 32%		7名 39%		0名 0%
②＋③	16名 57%		9名 39%		20名 71%		18名 100%		5名 56%
全体（106名）	講義型（38名，36％） ②複合型（38名，36％） ③演習型（30名，28％） ②＋③（68名，64％）								

※「②複合型」と「③演習型」はどちらも演習を含むという意味で合計値を算出

学生が望む「授業形態」については、専攻によってかなり差異がみられた。概観すると、社会専攻は「講義型」を、数学専攻と理科専攻は「演習型」（複合型）を望む傾向が強いようである。また、理科専攻の特徴として「講義型」を望む学生が0名という点は特記できる。そして、国語専攻と音楽専攻は「講義型」と「演習型」（複合型）とで二分する傾向のようである。

ただし、くり返すが、「教育課程論」の第7回目の授業時におけるアンケートである。筆者は既に、アクティブ・ラーニングを意識した授業スタイルを模索しながら実践しているため、「複合型」の数値に多少の影響を及ぼしている感も否めない。以下、学生の回答を数点紹介する。

〔①講義型〕

- ・先生が一方向的に説明する講義。(国語・女)
- ・100人以上、多数の講義。(社会・男)
- ・面白く、かつ知識を教えられる講義。(数学・男)
- ・講義、50人未満、少数制。(音楽・女)

〔②複合型〕

- ・講義で知識・理解を深めてから実習や実験を行う。(国語・女)
- ・講義と学生の意見を言う時間、意見を考える時間が混ざり合う授業。(国語・男)
- ・実践的な技術をつける演習と、基礎的な知識を得る講義が半々で混ざった形態。(社会・女)
- ・話し合いや、アクティブ・ラーニング中心。その間で講義形をはさむ。(数学・男)
- ・話を聞くだけではない授業。何かしらで自分の考えや相手の考えを発信、受信できる取り組みのあるもの。(数学・女)
- ・ただ聞くだけでなく、自分たちも参加していると思える授業。講義→実践(音楽・女)

〔③演習型〕

- ・交流を楽しみながら意見を言い合えるようなグループ活動。(国語・男)
- ・実習が目に見えて、身になるので、実習の形態がいい。(数学・男)
- ・実験をする → レポート提出。(理科・女)
- ・実験・実習形式。(理科・男)

上記(1)における福島の指摘及び学生の実態とともに、既述の中央教育審議会答申(平成24年)において学校教育へのアクティブ・ラーニングの導入が明確に打ち出されたことを受け、以下、学生の実践的指導力の向上を目指しアクティブ・ラーニングを意識的に取り入れている筆者の授業実践について紹介していく。

2. 「教育課程論」授業における冒頭部－アイスブレイク－

授業冒頭部には毎時「アイスブレイク」として、学校現場で活用できるさまざまな

ワークを学生に体験させている。例えば、「仲間さがし」というワークは、あるテーマ（血液型、目玉焼きにかけけるもの、好きなラーメン等）について、学生が教室内を歩き回りながら自分の仲間を見つけるというルールである。学生は手を挙げたり、大声で呼びかけたり、ジェスチャーを示したり等、個々人の考え方・やり方でもって仲間を探す様子が見られた。また、第1回目の授業において実践することにより、初めて出会った学生同士の緊張をほぐすことに効果が見られた。

その他にも、「一文字リレー」「一分間リレー」「ええ音を一つに」といった体を動かすもの、「肩もみ会話」「第一印象」「テレパシー」といった着席したまま取り組むことができるワーク等を体験させている。これらは、学校現場のさまざまな場面で行うことが可能であり、例えば緊張をほぐす場面（4月当初の出会い等）や、中弛みの時期などが考えられよう。ここで重要なことは、子どもたちへワークに取り組ませる際の「教師側の意図」である。さまざまな体験活動の背景にある「教師側の思い」を子どもたちへ伝えること、活動はあくまで手段であり目的ではないことなどを、実践後に学生へ伝えている。（図1、図2参照）



図1 「仲間さがし」



図2 「肩もみ会話」

その他、例えば小学校の場合、高学年では異性を意識して取り組みにくかったり、低学年では怪我をする危険性が高かったり等、「発達段階」を考慮した指導の留意点を確認する。また、ワークの中で子どもたち一人ひとりの個性（リーダーシップがある、素直に指示に従う等）が見えてくることをおさえ、それらを見取る「構え」が重要であることを伝えている。

学生の多くは毎時、ワークに夢中に取り組み、子ども時代に戻っているようである。学生が自身の教師像を思い描いたり、授業計画を立てたりする場合、その学生自身がこれまで学校教育で受けてきた授業や体験を基にして考えるのは、ごく自然のことであろう。学生に「学習者である子どもと同じ学習過程を体験させる」ことを意義あるものにするために、筆者自らが学生一人ひとりの言葉かけや動きを正確に見取り、ワーク後に「評価」を行っている。このことは、学生にとって子どもの気持ちを体感でき

ることに繋がっているようである。

以下、授業の冒頭部の「アイスブレイク」に関する学生の感想を数点紹介する。

- ・導入の際のアイスブレイクなど、自分が教師になった時に実践できそうなものを紹介してくれるため、役に立っていると思います。(国語・男)
- ・アイスブレイクは「遊び」のように思っていたが、「コミュニケーション能力」の向上になっていると実感できました。(国語・女)
- ・実際にワークをすることで、その意義を体感でき、楽しみながら毎回学ぶことが多くあると思う。(社会・女)
- ・印象的だったのは、「どのような活動にも目的がある」ということです。指導する際には、きちんと目的をもって指導していきたい。(数学・男)
- ・教員がリラックスした雰囲気をつくり出すことが重要だと思いました。さまざまなワークや遊びなどを取り入れ、それが学びに繋がるような授業を展開していきたいです。(理科・男)
- ・さまざまなワークはそれぞれ、子どもの特性を知るため、又は認める、ほめるなどの目的を達成するためのツールであることが分かりました。(音楽・女)
- ・ワーク（アイスブレイク）があることで、その後の本題に集中できて、毎週楽しい授業です。(音楽・女)

3. 「教育課程論」授業における中間部—講義—

教師として教育課程を編成していくためには、教育制度や教育政策、各種法令等の理解が不可欠である。アイスブレイク後、授業の中間部であり「中心」である「講義」を疎かにはできない。紙幅の都合上、講義の具体的内容については触れないが、講義の形態について概要を述べていく。

全 15 回の授業のテーマは、以下のように設定している。

- 第 1 回：教育課程の意義とその多義性
- 第 2 回：学習指導要領と教育課程
- 第 3 回：学習指導要領の変遷(1)：昭和 22 年度学習指導要領（試案）
- 第 4 回：学習指導要領の変遷(2)：昭和 26 年度学習指導要領（試案）、昭和 33 年度学習指導要領
- 第 5 回：学習指導要領の変遷(3)：昭和 43 年度学習指導要領、昭和 52 年度学習指導要領
- 第 6 回：学習指導要領の変遷(4)：平成元年度学習指導要領、平成 10 年度学習指導要領
- 第 7 回：平成 20 年度学習指導要領の改訂の経緯、目的・目標、構成
- 第 8 回：平成 20 年度学習指導要領に基づく指導計画作成に際しての留意事項
- 第 9 回：教育課程編成に関する三つの基本要素の理解

- 第10回：学校評価と教育課程改善の意義，評価の観点，仕方についての理解
- 第11回：カリキュラム開発とカリキュラム・マネジメント
- 第12回：「生きる力」をはぐくむ、教育課程全体計画の編成演習
- 第13回：編成演習で考えた「生きる力」についてのディスカッション
- 第14回：顕在的カリキュラム（Manifest Curriculum）と教師
- 第15回：中等教育の教育課程をめぐる諸問題と今後の動向

ただし、「受講生の要望や状況によって、授業内容の一部を変更する場合もある。」



図3 授業の様子

と規定している。

授業においては、毎時パワーポイントを使用し、穴埋め式のプリントを作成・配付して臨んでいる。重要語句やポイントは画面上赤字で示し、学生はそれをプリントへ書き込む作業を行うこととなる。書くことにより、学修すべき内容を確実に自身のものにしてもらうことを意図しているとともに、眠気防止効果にも繋がっているようである。

以下、授業の中間部の「講義」に関する学生の感想を数点紹介する。

- ・今までの教育の変遷、そしてこれからの変化に関する知識や見解が得られ、異なった視点(上の方 ex 文科省等)から見るきっかけになったと思う。(社会・男)
- ・「中等」と講義名に記載されているが、小学校の指導要領との比較等も行ってくださるので、復習と新しい知識の学習の両方ができて、とてもありがたいです。(社会・男)
- ・プリントが穴埋め式なので分かりやすいです。(理科・女)
- ・楽しむところは楽しみ(アイスブレイク)、集中するときは集中(講義)できるので好きです！(理科・女)
- ・楽しい。眠くならない。ONとOFFをしっかりとっていて、いいと思う。(国語・女)
- ・穴埋め式のプリントのおかげで、眠くならず最後まで集中して聞けます。(理科・男)
- ・毎回授業が楽しいです。1限目から体を動かすこと(ワークや穴埋め)をよくやるので目が覚めます。(音楽・女)

4. 「教育課程論」授業における後半部一対話・話し合い活動一

ここでは、授業の後半部に取り入れている「対話」及び「話し合い活動」について

触れていく。ここでの主なねらいは、アクティブ・ラーニングを意識したうえで、「対話力」（聞く力・話す力）の向上や「話し合い活動」による子どもと同じ学習過程の体験、共に学ぶよさの「実感」などである。

学生にいきなりグループでの話し合いをさせることは、難しいことである。杉田（2009）⁽¹⁰⁾は、「人間関係を築く態度を形成するための段階の踏み方」について、「まずはバディ（1対1）から」と指摘する。また、バディ（1対1）の後は、「一般的な方法としては、当初のバディとバディを合わせて四人にするという方法がやりやすい」とも述べている。そこで、第一段階として「1対1での対話」を設定し、自分の意見を相手に伝えることと、相手の意見を正確に聞き取ることの体得を目指している。

例えば、第2回目の授業において「これまでに会った恩師」というテーマを設定し、①あなたがこれまでに会った恩師の中で、最も印象に残っている一人を思い出して紹介することと、②恩師のあなたへの行動（接し方や言葉がけ等）にはどんな意義があったと思うか、伝え合う場面を設定した。このテーマは、自身の子ども時代の経験をふり返ることにより、「子どもの視点を感じ、考えること」に繋がり、さらにどんな意義があったかを考察することにより、「教師側の視点をも感じ、考えること」に繋がっていくことを意図したものである。

学生は、まず「話し合いカード」に自分の話す内容についてまとめ、それを基に相手に説明をする。具体的には、書き終わった後「1対1」のペアを組み、交替で一人2分間ずつ説明をし（タイムキーパーは筆者）、終了後お互いのカードに感想を書き合う（相互評価）という流れである。（図4、図5参照）



図4 「話し合いカード」

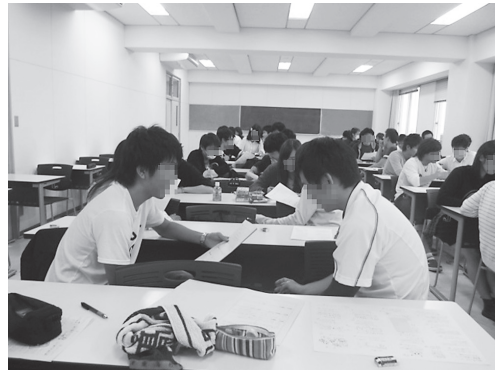


図5 「対話」の場面

「対話」の場面では、最初のうちはなかなか慣れない様子が散見されたものの、対話の相手を代えながら2回目、3回目と回数を重ねるごとに、どの学生も2分間での伝え方を体得できるようになっていった。同時に、聞き方について考えている学生も見られた。また、互いに説明した後、互いのカードに感想・評価を書くことを設定したことで、学生自身が後にふり返り、自学自習のための資料を得ることに繋がった。

この1対1による「対話」を数回重ねた後、4名グループによる「話し合い活動」へと意図的に移行していった。一例を挙げてみると、学校教育法施行規則第72条「中学校の教育課程」（各教科等）について学修したのち、「中学校の「新教科」を一つつくろう。」というテーマを設定した。

学生は、「自身が受け持つ子どもたちや地域の実態等を自由に想定し、もし自身の勤務校にて自由に一つ新たな「教科（科目）」を創設することができたとしたら、どのような教科（科目）が必要と思うか。」というユニークなテーマのもと、まずは「話し合いカード」に自分の話す内容についてまとめていった。書き終わった後、4人組のグループをつくり、以下の注意事項を示してグループ活動を行った。

- ・司会進行役を1名決めること。
- ・タイムキーパー役を1名決めること。
- ・まずは一人1分間で説明すること。
- ・全員が説明した後、「話し合い活動」により、最もよい「新教科（科目）」を決めること。

1対1による「対話」を積み重ねてきたこともあり、話し合い活動はスムーズに進んでいった。また、発言をしないまま過ごす者も出さず、互いの意見を聞き合うこともできているようであった。最後に、すべてのグループの司会進行役が、それぞれのグループにおける話し合い活動の様子を報告する時間を設定し、情報共有の場とした。このような「話し合い活動」は、今後もグループメンバーや人数を代えながら、回数を重ねていく予定である。積み重ねることにより、学生は話し合い活動の進め方を考えながら体得しようとするであろう。グループで意見を出し合いながら、協力して解決へ向けての話し合い活動を行うことに留意したい。

以下、対話・話し合い活動に関する学生の感想を数点紹介する。これらは、第7回目の授業において行ったアンケートからの抜粋であり、「この授業『教育課程論』について、あなたの考えや感想、要望等を教えてください。」という質問項目である。

- ・ワークがおもしろいかつ、しっかりとしていて、授業全体を見ても、まとまっていて、受けていて楽しいです。（国語・男）
- ・「相手を知る」ということは、自分の何かにつながる大切なことだと思います。この授業を通して、交流の場は確実に広がり、また、「教師」という立場を想像できるすばらしい授業だと思います。（国語・女）
- ・動く、話す活動が多くて、他の授業とはひと味違う感じが思いました。（社会・男）
- ・様々な人と意見や自分の考えを話す機会があるので、自分とは違う考え方も知れるのが良い。（社会・女）
- ・1対1での対話が、話し合い活動の基礎であることを実感できた。（数学・男）
- ・毎回対話する機会があり、授業に積極的に参加できる。（理科・女）
- ・授業をする中で普段かかわらない人と関わるきっかけになって、この授業を通して仲良くなれた人がたくさんいます。私も、授業を通してクラス内が仲良くなれ

るような授業をしたいです。(理科・女)

- ・1対1の話し合いでの学びが大きかった。自分の思いや考えを言葉にして伝えること、聞いてもらうこと、相手の話を聞くことは、積み重ねが大事だと分かりました。(音楽・女)

5. 出席カードの活用—双方向授業の可能性—

最後に、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業スタイルを意識した「出席カードの活用」についての実践について触れていく。

学生は毎時、授業後に出席カードを提出することになっているが、裏面を自由記述欄としており、学生自身の本時のふり返りや授業の感想、教員への質問、その他日常生活の報告等、自由に記述させている。筆者はこれらすべてに返信コメントを手書きし、次時に印刷・配付することを課している。(図6参照)

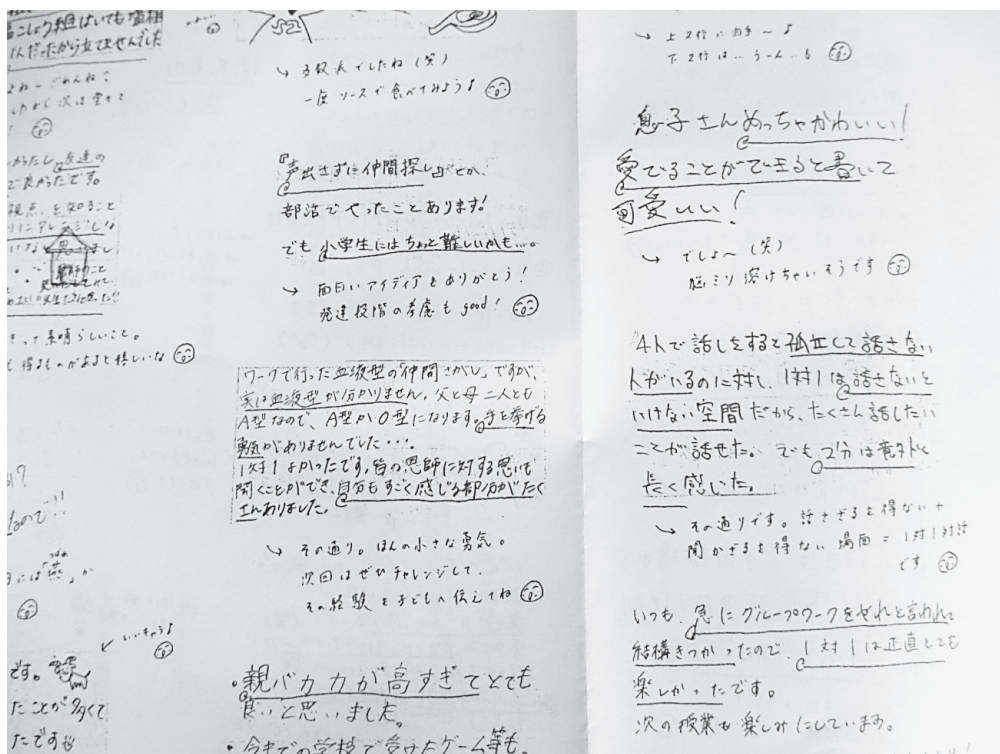


図6 「学生コメント集」

受講者の内、ほとんどの学生がコメントを書くため作業に時間はかかるが、このコメント集は大きな役割を果たしている。出席カードの裏面であるため、無記名で学生は率直な思いを記述することができる。学生にとって、このコメント集は筆者との「対話」

であり、また、共に学ぶ仲間との「対話」でもある。学生は、自分と同じような思いを持つ仲間がいることに気付いたり、誰か分からぬ同級生の鋭い指摘や深い考察に感心させられたりする。このコメント集により、学生はいつでも学修をふり返ることができ、同時に自学自習への意欲を持つことへ繋げることが期待できる。さらに、大人数授業における「双方向授業」を可能にする一つの展望を切り拓いたと指摘できよう。

以下、学生コメント集への学生の感想を数点紹介する。筆者との「対話」及び共に学ぶ仲間との「対話」であることをさらに意識付けていくよう留意したい。

- ・いつもコメント読むことも楽しいです。(国語・女)
- ・コメントの返事を読むと、前回の復習にもなるので、授業のはじめに読んでいます。(社会・男)
- ・出席カードの裏の感想に毎回コメントをくれてうれしかったです。(数学・女)
- ・みんなのコメントを時々読み直しています。いろいろな考えがあって面白いなと思います。(理科・女)
- ・出席カードの裏に書いたことにコメントが書いてあるのもとても嬉しかったです！(音楽・女)

おわりに

本稿では、筆者が担当する教職課程科目「教育課程論」において、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業スタイル開発を念頭に授業実践の検討をもとにまとめてきた。学生の感想から、理論と実践の調和を目指した一定の授業スタイル(冒頭部の「アイスブレイク」、中間部の「講義」、後半部の「対話・話し合い活動」)を確立してきたことへの肯定的な意見が多かった。特に、1対1での「対話」の積み重ねから、グループによる「話し合い活動」への移行に関しては、「自分が教壇に立ったときにも意識したい」等の意見が多くみられた。これらのことから、授業において「対話」及び「話し合い活動」を意図的に取り組むことが、学生の「教育課程論」への理解、考察の深まりへ繋がること、実践的指導力を身に付けさせる授業スタイルについて展望を切り拓いたことが指摘できよう。

一方、課題としては、

- ・アイスブレイクとワークに時間がかかりすぎていて、内容がおろそかになってしまっているのでは？と思ってしまう。(国語・男)
- ・詰めこむ知識量が少なく感じるので少し心配。(理科・男)
- ・書いたりするのがもう少し多くてもいい。(音楽・女)

という意見もあり、今後の授業内容・方法の改善・構築に向けて参考にしたい。

また、実践に対する検証の方法が脆弱であるため、研究の理論的枠組みをより緻密にするとともに、実証的な裏付けを得るための方法を開発することが求められる。「教育課程論」の授業計画の後半(教育課程の編成、カリキュラム・マネジメント等)に

においても検証を継続し、科目担当者としての資質向上及び教員志望学生の実践的指導力を身に付けさせる方途を探っていくことを自身に課していきたい。

注記

- (1) 林幸克・長沼豊「教職課程科目『特別活動の研究』の学習効果に関する研究－模擬行事実習の教員役と生徒役による差異に着目して－」『日本特別活動学会紀要』(第16号), 日本特別活動学会, 2008, pp.53-63
- (2) 富岡勝「教職課程科目「特別活動の理論と方法」に関する考察」『近畿大学教育論叢』(第26巻第2号), 2014, pp.69-89
- (3) 北秀和「授業実践報告－アクティブラーニングによる「教育方法論」(アクティブラーニングの要点は課題の与え方)」『大阪工業大学紀要』[電子版](第61巻1号), 2016, pp.49-63 (閲覧日: 2016.11.10)
<<http://www.oit.ac.jp/japanese/toshokan/tosho/kiyou/2188-9007/61-1/61-1-04web.pdf>>
- (4) 宮島基「生徒の主体性を考える「教育課程論」－授業実践とその分析－」首都大学東京紀要『教育科学研究』(第27号), 2013, pp.19-29
- (5) 西川(2015)は、「学修者の能動的な学修への参加を取り入れ」なければならないこと、「認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成」を図らなければならないことの重要性を指摘している。西川純『すぐわかる!できる!アクティブ・ラーニング』学陽書房, 2015, p.19
- (6) 福島紘「毛筆書写の授業を通して、学生に「共に学ぶよさや課題解決過程における充実感・達成感」を体験させる試み～小学校国語科～」『星槎大学附属研究センター研究集録』(Vol.9), 2015, p.16
- (7) 本稿執筆時においては、半期15回の授業予定数のうち7回目を終了したところである。そのため、免許法施行規則の「含めることが必要な事項」にある「教育課程の意義」については学修済みであるが、「教育課程の編成の方法」や次期学習指導要領、教職課程に含まれる「カリキュラム・マネジメント」については学修前である。全7回の授業においては、教育課程の意義や定義、教育課程の基本的な構造、「学習指導要領」の変遷と次期指導要領、教育課程に関する法制(教育課程とその基準、教育課程に関する法令、各学校とのかかわり等)等を修めた。
- (8) 前掲書(4), p.21
- (9) 本アンケートは、2016年10月28日(金)2限[数学専攻・理科専攻]及び11月2日(水)1限[国語専攻・社会専攻・音楽専攻]の授業内にて、学生の方の了承を得て実施した。(無記名回答, 専攻名と性別のみ記述)
質問項目は7つ設定したが、本稿では「あなたが最も望む授業の形態は何ですか。」「この授業『教育課程論』について、あなたの考えや感想、要望等を教えてください。」の2項目を参考にした。
- (10) 杉田洋『よりよい人間関係を築く特別活動』図書文化, 2009, pp.87-90